

宇沢弘文述「アダム・スミスをひもとけば、経済学が金より“人間”のためにあるとわかるさ」

Fole 2009年10月号、みずほ総合研究所 2009年10月1日刊を読む

「あなた、アダム＝スミスは読んだ？」

「神の見えざる手とか、あらすじだけ……」

「1776年に出版されたアダム＝スミスの『国富論』が、経済学の原点です。アダム＝スミスはスコットランドの小さな港町に生まれました。その少し前にスコットランドはイングランドに合邦され、もともとあった言葉、文化、自然、歴史が破壊される。そんななかで彼は育ち、グラスゴー大学に入る。数学と、古典ができてね……」

初めて経済学に触れる学生に教えるように、宇沢さんがアダム＝スミスについて語り出す。突然始まったぜいたくな授業に、ひたすら耳を傾けた。

「卒業してオックスフォード大学で学んだ後、アダム＝スミスはMoral Philosophyの教授になる。そこで人間が人間らしく生きるとはどういうことかについて深く哲学し、*The Theory of Moral Sentiments*、いわゆる『道徳感情論』を書く。これが思想の出発点で、20年後に大陸旅行から戻って『国富論』を書きあげた。人間らしく生きるには、衣食住などの物質的な豊かさがある程度なくてはいけない。そこで、経済的に豊かになるにはどうすればいいのかを、深く掘り下げたのが『国富論』。経済学というと、さっきあなたが言ったように金をもうけて競争して勝つことのように思われているけど、そうじゃないんだ。彼は植民地化と、封建的な社会の下で苦しんだが、それを超えて『国富論』を書いた。これこそが、経済学の原点なんだ」

P27

#### [コメント]

アダム・スミスを読むときの基本的な視点をわかりやすく説明している。宇沢先生のこの視点を大切にして、アダム・スミスの「国富論」、「道徳感情論」、「法学講義」の三部作を読み直すことが、これからの世界を考えるとき役に立つ。

- 2009年10月6日 林明夫記 -